社会学の国際化に関する研究（2）

――日本社会学会員調査の概要と横浜大会参加者調査との比較――

専修大学　金井雅之

1　目的

2016 年 2～3 月に日本社会学会員を対象に実施した「社会学の国際化に関する調査」（以下「学会員調査」）の実施方法と結果の概要を紹介するとともに，2014 年 7 月の世界社会学会議横浜大会時に会議参加者を対象に実施した A Survey on the Internationalization of Sociology（以下「横浜大会調査」）の結果との比較を試みる．いずれも社会学の国際化についての評価や国際的な研究活動へのかかわりを回答者の属性や経歴とともに尋ねている．両調査には比較を意図した共通する設問も含まれている．

2　方法

学会員調査の調査対象は，2016 年 1 月の時点で学会員向けオンライン名簿に電子メールアドレスもしくは郵送先住所が登録されていた日本社会学会員 3,487 名である．実査は（株）日経リサーチに委託し，2016 年 2 月 15 日～3 月 25 日にオンラインで実施した．具体的には，対象者への調査の依頼をメールまたは郵送で送付し，個々の回答者に割り当てた一意の URL にアクセスして回答してもらった．調査期間中に（株）日経リサーチから未回答者に 2 回，日本社会学会事務局から全会員を対象に 3 回，督促のメールを送信した．回答者数は 1,037 名，回収率は 29.7%であった．

横浜大会調査の調査対象は，2014 年 7 月 13 日～19 日に開催された世界社会学会議横浜大会の登録参加者全員（国際社会学会によれば 6,087 名）であり，コングレスバッグに調査票を同封の上，大会期間内に回収ボックスへの提出を依頼した．回収数は 817 票，回収率は 13.4%であった．

3　結果

学会員調査の結果の詳細は世界社会学会議組織委員会のウェブサイト（http://www.wcs2014.net/）で公表されている．ここでは経験や活動に関連する重要なポイントに絞って紹介する．海外への「留学」の経験は，交換・短期留学が 18%，大学院博士課程が 11%である一方で，まったく経験のない人が 70%存在する．3 ヶ月以上の「在外研究」は，まったく経験のない人が 74%存在する．「国際学会」は，参加した経験のある人が 87%，報告した経験のある人が 69%存在する．「海外の研究者との共同研究プロジェクトへの参加」は 38%が経験している．「外国語での研究業績」は，外国語の論文がある人が 54%，国際的な学術誌への掲載経験のある人が 28%，外国語の著書のある人が 15%存在する．最後に「外国語による社会学の授業経験」がある人は 14%である．

一方，横浜大会調査の結果のうち学会員調査との違いが目立つのは，以下のような点である．「留学」経験がない人は，学会員調査の 70%に対して，35%しかいない．「在外研究」の経験がない人も，学会員調査の 74%に対して，23%しかいない．「出身国以外の大学で社会学を教えた経験」がある人は，学会員調査の 20%に対して，39%存在する．

4　結論

国際的な研究活動については，学会参加，報告，外国語での一般論文，共同研究への参加，外国語での査読つき論文や著書，外国語での授業，の順で経験者が少なくなっていく．これは，国際的な研究活動へのかかわりにレベルもしくは段階が存在する可能性を示唆している．

留学や在外研究の機会については，学会員調査と横浜大会調査との差が目立つ．横浜大会調査は，実際にこうした大会に参加している人のみが回答していることなどを差し引く必要があるものの，学会等による制度的な取り組みが必要である可能性を示唆している．